

新刊紹介

Serindia

Sir. A. Stein.

セリンディアとはセル、インディアである。セルとはラテンのセレス即ち絹若くは支那を意味し、隨てセリンディアとは支那的のインディア（印度）といふことで、從來東方土耳其（Eastern Turkestan）だの中央亞細亞だのと呼ばれてゐた千闐庫車、高昌、燉煌などの地方一般に與へられた名稱である。我々は從來西域諸國の名で呼んでゐた。然し歐洲からの方位から云へば適當でないで更にこのセリンディアと云ふ名稱が出來た。これを唱へたのは西域發掘の巨擘オーレルスタイン其人である。

スタインの名は西域考古學者の中に天鼓のやうに轟いてゐる今更喋々する必要もあるまい。『古代千闐考』（Ancient Khotan）にしたところが『印度考古學報告』にしたところが、『契丹の沙漠』にしたところが何れもしてその大規模にして周到な探險ぶりの決して他に追隨を許さぬものがあることを肯せしめないので無い。然るに今度これらのものを更に一纏めにして牛津大學のクラarend印刷局から出版したのがセリンディアと題する四卷（外に附圖一卷）の大形クォルトの大著作である。一卷各々五百頁内外三百四十五個の寫眞版、百七十五個の精巧な極めた玻璃版を收め、探險に關するあらゆる記事發掘物の總ての目

録を載せてゐる。中にも燉煌千佛洞の壁畫の如きは最も注意すべきものがある。

この五卷の大著は今度大谷大學に到着した。研究者の閱覽を待つてゐる。（一九二一年牛津大學印刷局發行）（泉）

西藏傳印度佛教歷史上 河口慧海著

西藏學者は印度佛教史を如何に傳へてゐるか。之を成るべく廣く且つ多く紹介せん」として「西藏に著名なる十一種の史書を選びその中より逐次翻譯し序に隨つて編纂され」たものである。今回出版の上巻は先づ前記十一書の佛傳に關係ある六書によりて成つた西藏所傳釋迦牟尼傳である。その素材たる六書とは

- 1 Lam-Rim Rgyud-Pa'i La-Ma'i Rnam-Thar Na-Pa
ボタラ版
- 2 Vaidurya dKar-Po'i gY'a-Sel.
ボタラ版
- 3 dPag bSrn Ljon bZan Calcutta, 1908 及 寫
- 4 Dam-Pa'i Chos-Kyi hKor-Los bSgyur Pa 寫
- 5 Rgya Char Lor Pa ナルタン版
- 6 bDe gShag gTan Pa'i Chos lYn'i シヤール版タシル
ンボ版デルグ版

にして、序文に解説してある。本文は百八節に分ち、西藏所傳の史料を別に品等をつけず、何くれとなく安排してある。一出據を示し、まゝ、地名人名等の考證を加へてある。三十五頁に亘る目次はやゝ便宜に出來てゐる。先人未到の材料を容易に

得せしめたる本書は學界から感謝せられねばならぬ。西藏所傳は餘程あやしいもので印度佛教史の暗を照すにはあまり役に立たぬといふ一部の批評が猶肯定さるべきか、或は撤回さるべきか、本書及び嗣いで公にされるであらうさこの佛滅後の印度佛教史によつて更に専門學者の研究に俟たねばならぬ。本書内容の翻譯及び取捨の適否は私にはまだ云云する資格がない。謹んでさもなくもこの困難なる翻譯を完了せられし編者に敬意を表する。

(菊版布裝本文三二〇頁貝葉書院一月發行價三八〇)(鏡)

原始佛教思想史

木村泰賢著

印度哲學宗教史及び印度六派哲學の著に繼いで此度發行されたのが本書である、序分に依れば本書は歐洲留學中英獨に在て書かれたものであるといふ。其元氣の盛なるには一驚を喫せざるを得ない程である。本書の大體は三部に分れて、第一は大綱論、第二は事實的世界觀、即ち苦集二諦論、第三は理想と其實想、即ち滅道二諦論である。要するに苦集滅道の四諦を中心として、釋尊の眞精神をつかまんとするのであつた。唯從來小乘佛教が考へて居つた單なる現象論に止まらずして、今少しく深く立ち入て、其裏面には本體論的思想のあつたことを主張して居るのが本書の特色である様に思ふ。大衆部の様な思想も釋尊の上に既にあつたといふのであつて、其事は前田博士も大乘佛教史論の上に一寸論ぜられてあるが、著者は其を今少しく研究的に説明して居る。論旨穩健にして近時稀に觀る善い書の一に

數へてよい様に思ふ。誤植は割合に少いが、成語に一寸不穩當かと思はるゝのが二三あつた。尙索引の頁數のつけ方がよくない、あれでは誠に引きにくい。菊版大約五百頁、價四圓、發行所東京丙午出版社。

大乘起信論之研究

望月信亨著

起信論が印度出來か支那出來かに就ては、此數年來のよい研究題目であつて、著者は支那出來を主張し、常盤博士は印度出來を力説して、互に論難往復した。著者は此問題を骨子として本書を著し、大體を三部に分けて第一が起信論支那選述私見、第二注釋書解題第三が本文論述である。支那選述私見に於て敵對する處は常盤博士であつて、其論鋒は可なりに鋭い。唯研究漏れとなつて居るかと思はるゝ點は西藏史料である。西藏史料では馬鳴は龍樹及び提婆の弟子だといふ、丁度勝鬘經などの盛に行はれた時代に馬鳴が出世したとなれば、何ぞか幾分の研究が欲しい様に思ふ。次に起信論の經釋書を百七十六部まで研究せられた事は可なりの努力ではあるが、しかし大谷大學や龍谷大學が挿索して見るさまだ確に二三十部は増加して行く。大須賀秀道氏のは講義録であるから省いても、隈部慈明氏の精義は新刊のものとしては可なりよい書である。大谷大學の圖書目錄で見ると刊本としては尊祐の專釋鈔序註、松本惠秀編の科圖がある。又寫本としては經歴の連珠鈔一卷、信宿の講林六卷、弘宣の顯理鈔三卷、慧然の眞心義一卷、隨慧の句解七卷、山本嚴識の講案六卷、其他假名交り文の聞書類二三本がある。次に龍

谷大學の圖書目錄で見ると、刊本としては淨眞の分節一卷を載せてゐる。其事は淨眞の下に一寸記してはあるが、しかし刊行されたことが記していない。次に寫本としては、慧琳の機要四卷法住の私記五卷、崇諱の筌蹄五卷、眞徹の玄談一卷、僧默の玄談講翼一卷があつた。新本としては湯次氏の新釋、加藤咄堂氏の講話がある。外に假名交りの文の講錄數部があるから、兩大學の分だけでも可なり増加される事になる。他日折を見て編入あらんことを希望して置く。又龍谷大學には、鳳潭の講議斥謬一卷があるが、多分起信論には關係がなかつたと思ふ。第三部は本文の講義で、終りに新舊兩譯並に異本對照の本文が附してある。又卷初には天平勝寶及び神護景雲の古寫本、外に各種版本の寫眞版が出してある。約六百頁の大著、價六圓八拾錢發行所は東京市金尾文淵堂。

大日本金石史

木崎愛吉著

本書は三冊と外に附圖百葉餘あつて可なり大部のものである。卷一冊は平安朝終りまで、第二冊は南北朝終りまで、第三冊は桃山期までといふ様に分けて、其時代／＼の金石文を列記し、之に解説を加へたものである。加ふるに附圖が澤山あるので、拓本採集者の爲には至極結構なものと思ふ。しかし本書は金石史といふよりは寧ろ金石文といふ方が適當の名稱であらう。これだけ集めた努力に對しては敬意を表するが、漏れたものもまだ澤山あるらしい。例せば豊橋地方では、伊那八幡社の鐘は入であるが、隣村小坂井鬼足神社の鐘は入でない。京都でも粟島

堂の斷碑及び石佛（今は燈籠の臺となつて居る。）善導寺の三尊佛、日野附近の重衡墓、宇治慧心院の置石、元黒谷青龍寺の墓鞍馬口大谷大學專用道路の石碑、坂本西教寺の阿彌陀佛及び二十五菩薩の石像の如き何れも皆漏れて居る。一冊は菊版凡五百頁價二十五圓、發行所大阪市塩町好尚會。

現代思潮よ 佛教の根本思想

友松 圓 譯 補

近時歐洲に於て東洋研究が盛んなるに共に、佛教の研究が眞面目に行はるゝ様になつた。

著者 Ernst Hoffmann は、今度の大戦に参加し重傷を負ふて永くセント、ブラシムに靜養してゐたが、彼は非常に熱心なる佛教信者であつて、セイロンに行かんを欲し、遂に獨逸の高僧にして、日本に滞在してゐる、ニヤナチロカ長老について一比丘となつたと云ふ。

この著の原名は Die Grund gedanken des Buddhismus, und ihr Verhältnis zur Gottesidee (佛教の根本思想、並びに神の觀念に對するその關係)と云ふのであつて、印度のアグラに於て一九一九年に書き一九二〇年にライプツヒの佛教書肆としてかなり有名なマクス、アルトマンから出版したものである。而し彼は獨逸の佛教學界で重要な位置を占むべき人物ではないがその極めて近代的の表現は既に佛教諸雜誌の上に於て賞讃され本書に綴つた佛教思想はかなりに獨逸佛教界を驚かしたものと云ふ。而し本來がキリスト教の畑に育つた人であるのみならず

既に獨逸佛教雜誌に於て批評せられてゐる如く、純粹を正統派の其とは多少相異して、かなり自由なるものなることを吾人は注意せねばならぬ。

先ずこの書編を三に分つ。第一編基督教の神の觀念について第一章人格神、第二章創造神、第二編佛教の根本思想、第一章佛教の目的、第二章眞の存在について、第三章存在と世界、第四章生命と苦惱との連鎖、第五章世界論、第六章解脱にいたるの路、第七章涅槃。第三篇佛教の思想と神の觀念との比較、第一章神の觀念と佛教の思想、第二章一元的世界觀としての佛教著者は更に解説して云ふ「この一文は佛教々理を説明せんとして論述せらるべきものではなくして、むしろ私自身の宗教的發展の單なる一映像にすぎない。始めはキリスト教の熱心なる信者として、そのキリスト教の理想と發展とに自己を沈潜せしめてゐたのである。かかる内に吾人の信仰がキリスト教の原型からいかに遠ざかつてゐるものか、更に又その殊有な本質は吾人に對して知られてゐないものであることを漸次明に知るにいたつた。……キリスト教の内に於ける中心問題は云ふまでもなくかの神觀である。この神觀に對する矛盾は直に私をして教會から完全なる分離を持ち來たし、私のうちにある舊信仰の最後の部分までも洗ひ去つてしまつたのである。こゝに於て私は全く新しく私の信仰を建設し直すべく要求せられ、長い間の要求と試練とによつて、私は佛教々理の眞理が唯一のたしかなる根據をなすものであること、同時に又キリスト教と云へども佛教の尤も深き本質に於て生ずることを知るに至つた」と、この上

に譯者友松氏の序と「佛教の根本思想より見たる現下の日本佛教」なる後文とよりなるのが本書である。（東京市麹町區山元町新光社發行定價貳圓）（環）

華嚴哲學小論攷

土田杏村著

序に云ふ「宗教の論理の中に無いが、併し全然論理と離れたものでない。佛教の經典を論ずるの學者は我國に其數決して乏しいとは云はぬ。併しその論ずるところを見るに、佛教史學に屬すべき歴史的考証の議論に非れば、論理を離れたる教義的説教のみである。其處には殆ど全く佛教神學(The Buddhist Theology)とも稱すべき、佛教經典の宗教哲學的考案が缺けてゐる」と以て此書成立の動機と使命をうかがうことができる。

今その内容を驗するに、第一章佛教に於ける價值と實在の問題——阿梨耶識の眞義に就いて。第二章華嚴の衆微的教理——法華經と華嚴經との關係に就いて。第三章三細に就いて。第四章用染淨の一考察。第五章佛教に於ける無所有。第六章佛願と至心信樂——大乘佛教の要諦と奉仕の精神。なほ附録として、第一杏村君の「奉仕と佛教々理」を讀む（石川舜台）、第二佛教に於ける價值と實在の問題補遺、華嚴の衆微的教理補遺、なる以上の八編の論文によつて成つてゐる。

而して著者自らの言を斷章取意し以て詳述すると「第一章から第四章までの論文は、大乘起信論を讀みつゝ思索の順序を書き止めてゐた其々のノートで、第一章は自分の起信論考察の發端である。この見方をさるが故に自分は起信論を重視する。

阿梨耶識に認識論的考察を試みた最初の論文になったと思ふ。第三章はなほこの發展して見た三細の意味を考察した。第二章は珍らしい意見で無い。他の諸注疏のまる寫しみたやうなものだ。併し華嚴教を以て、一即一の教義を説いたものとしたところに、自分の多少の意見が這入つて居る積りだ。第四章は更に第一第二章の發展である。これ等にはいづれも結論がない。これ本來、私だけのノートに止めたからである。併し途中の推論に多少の意見を立てて居る。第五章と第六章とは合して一つの論文を構成したもののだが、今便宜上、其に多少の訂正を加へて二文に分つた。社會問題と大乘佛教との關係を論じたものである。」

思ふに著者は、現代の哲學、殊に西南ドイツ學派の立場に立つて、佛教の問題を、解明し、救釋し、論理的に將にその行くべき方向へ發展せしめんと試みたものである。茲に氏の試みられし如き事業への問題があると思ふ。即氏の取り扱はるゝ佛教によつて與へられたる問題は、多く現代哲學よりせば、古き形而上學のすがたに於て示されてある。しかも現代哲學は、その自身過度に於てある問題その自身である。我等は、氏と共に古き形而上學を論理的に救ひたきと同時に、それがもつて高き調子と匂ひを又何かの形式に於て救ひたいのである。(京都市西洞院七條下ル内外出版株式會社發行定價貳圓)(環)

山 水 經 橋 川 正 著

本書は著者最近數年間に於ける旅行記と、旅の歌とによつて

成立つてゐる。旅行記といへばさて單なる趣味的紀行文ではなく、著者專攻とする史學を背景としたる、史蹟探訪記といふべきである。しかし是れを彩るに氏獨得のさう／＼とした文章を以て織り成してあるから、知らず識らず一氣呵成に讀ましめる。内容は一、親鸞聖蹟巡拜の旅より。二、再び水郷を慕ひて三、蓮如上人御遺蹟めぐり。四、夏の高野。五、晩春の奈良。六、阿波の國より。七、鮮滿半月。八、奉天の二日。九、新羅の古都を訪れて。一〇、海印寺行。一一、わが旅の歌。等十一編に分たれてゐる。

綠陰風薫るの時、敢へて本書の一讀を望む。(發行所京都下珠數屋町丁子屋。價一、五〇)(楠邱)

價值生活の體驗 高 神 覺 昇 著

こんど、高神覺昇氏によつて、標題の如き書物が、谷本、西田兩博士の序文つきで出版された。自序に云ふ如く、氏の最近の比較的統一のある論文を集められたものらしい。内容は、價値の生活、佛教の本質、法界に入るまで、公開せる秘密、目醒めたる自我、俺は俺だの哲學、世界の謎、中論哲學の眞髓の八章からなつて居る。氏は西田博士に師事せられ、佐々木教授に師事せられた人である。この書一部に通じてこの二人の師の教の面影を色こく見得るものがある。龍樹、就中、中論を中心として佛教を新しく、西洋哲學的の見方を以て解明しやうとしたものであらう。されば現代の人々にわかりやすく平面的に解釋せられて居ることはよろこばしい。しかも、現今の私たち

は、解釋よりも先に問題を求めつゝあるのではなからうか。謎をさくことよりも、謎におどろくことを求めて居るのではなからうか。又、古い傳統にさちこめられた佛教々學が、氏の如き新人によりて新しい道に展開されてゆくことは心強いことである。なほ、その一面、佛教は佛教の思考法によつて考へられねばならず、佛教の思想は、佛教思想そのものによつて問題を與へられ、又、これをさかればならぬものがあらう。佛教が現代語に翻譯され解明さるゝこともに、現代佛教の語が流布され佛教の眞理がしかるゝことがなほさらに切なるものがあることを信ずる。かく佛教が現代化さるゝことを喜ぶよりも、むしろ現代が佛教の眞理(信)にすべらるゝことを願つてやまないものは私たちのみではなからう。かゝる意味に於て、更に、古い佛教界の新人たる氏等の研究によつて、佛教による佛教思想の研究のあらはれることを念じて居る。(英)

光壽第三輯 光壽第三輯には、光壽會編、藏經の解説

が三十頁ついて居る。簡単に各種藏經の事が書いてあつて、一寸便利にできて居る。尙附冊として各種藏經の寫眞版が二十四葉ある。寫眞版の中で、私の手に來たのは生憎第五圖と第六圖と圖だけが入れ違ひになつて居る。蜀版の下へ西域記、麗版の下へ本行集經となつて居るから、此は妙だと思つたが、誤綴らしい。第七圖の下に雨雕さあるは再雕の誤植である。福州版は東漸寺の方も寫眞が欲しかった。有名な北宋の元豐三年版があるではないか。湖州版は思溪の文字ある寫眞が欲しい。元版も

普寧寺、延聖寺の寺名あるものなぞ撮影せなんだか。折角の寫眞であるから、今少し精選して欲しかった。解説の下で一寸氣づいたのは、福州版は明に二本あるものと見てもよい。東漸寺の方は東寺、上醍醐にある。開元寺の方は智恩院にある。尤も少々は他のものが雜つて居るが、戮力して一藏を刻したのでないことは明かである。積砂版は極めて珍稀だと書いてあるが大藏會に出た丈でも可なり澤山あるではないか。黃梁版には續藏が少々あるが、其事が少しも記してないので、倉光君は殘念がつて居るだらうと思ふ。六號活字版は二冊丈出來の様に書いてあるが、此も阿含が今一冊出來て居る。此處には少々の缺點を長々と記して見たが、しかし大體に於て要領を得た書き方であるから、藏經といふことの智識を得やうと思ふ人は是非一本書を讀んで貰はれたきことである。非賣品ではあるが、實費壹圓貳拾錢ほどで分本ができるといふ話。發行所は京都六角烏丸六角會館内、光壽會。

眞宗の經驗と戯曲「出家とその弟子」

文學博士 高楠順次郎著

本書は表題の示す通り、眞宗の教義信仰から「出家とその弟子」の宗教的内容を批評したものである。

その前提として初めに佛教と基督教とを比較して兩者の根本的相違を示し、次に眞宗の教義信仰と基督教のそれとは絶對に相容れないところあることを詳説し、次にはこの兩者を混合す

る風潮あることを各種の方面より説明してその誤りを正し、最後に「出家とその弟子」の宗教的内容が全然基督教の信仰である（中に佛教の信仰と云ふべきものはみな淨土宗の信仰である）ことを引文批判されてゐる。（定價金八十錢東京市赤坂區大日本眞宗宣傳教會發行）（猷）

宗教と眞宗と社會主義と資本主義

野依 秀 一 著

獄窓に於ける定教的經驗、即眞宗の安心によつて宗教の本質は個人的心靈的の救済にあることを説き近時非宗教的運動を呼起する社會主義者の一派の存するにつき、之等の人人に宗教に對する無理解を戒めんとするのである。しかも、社會主義は文化的に必然なることを認め、資本主義の前者に遷るべきことを豫想してゐる。ために眞宗を社會主義に對して黙々の内に辯護する。かくて宗教は宗教の純粹性と處自性に歸ることによつて、利用と反感と妥協を離れて、たゞへ間接さは云へ、社會制度上の問題をも解結に導びく所以を、處斷的とは云へ、ごく通俗的にかいてある。

（發行所東京赤坂區池町三ノ十定價五十錢）（環）

最近佛教關係雜誌論文一覽

（四月—六月）

（A）典籍研究

原典より見たる敎行信證中の引用經典

……（泉芳璟）佛教研究三ノ二

西山上人の觀經疏大意の研究（上杉慧岳）……同

明義進行集追考（橋川正）……同

敎行信證延書古寫本の研究（日下無倫）……同

敎行信證御延書本に就て（上杉文秀）……宗報五、

唯識論泉鈔の撰考（小野玄妙）……無礙光五

選擇集の古版本に就て（藤堂祐範）……同

選擇集の建曆版建長版及び木活版（同）……摩訶衍二ノ二

六要鈔と了慧の大經鈔との交渉（小山法城）……佛大論叢

縮刷大藏經の開板に就て（足利宣正）……同

梵網瓔珞二經の成立年代と其敎理とに就て

……（宮城信雅）哲學研究五

歡異鈔と異義（梅原眞隆）……親鸞聖人研究二

釋摩訶衍論の史的研究（香川英隆）……密敎研究

蒙古譯法華普門品（橋端超）……大乘四

勝者所行讚譯（日暮京雄）……合掌五、六

惠心僧都全集索引（荷岡義衷）……徽山宗教五

（B）敎理研究